The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 意味拡張における説明概念としてのシネクドキの役割とメタファーとの関係 |
| Author(s) | 山泉, 実 |
| Citation | 日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 50-66 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/69215 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 意味拡張における説明概念としてのシネクドキの役割とメタファーとの関係*

山泉　実

## 1.　はじめに

慣用句・ことわざ・個人名の比喩的使用にみられる意味の拡張にメタファー(隠喩)が関わっているのかシネクドキ(提喩)が関わっているのか，同じ表現についてさえ認知言語学者の間で見解が分かれている。例えば,「舵をとる」を籾山(1997, 2002)はメトニミー(換喩)＋メタファーとしているが, 笠貫(2013)はメトニミー＋シネクドキとしている。籾山(2002), 笠貫(2013)はどちらも認知言語学の教科書(かその一部)であるにも関わらず, 興味深いことに意見が相違している。本稿は，この問題(以下「隠喩か提喩か問題」)を発展的に解消し，本質的に同系のことばのあや(佐藤 [1978]1992: 201)と言われる両者の親近性(p. 203)に新たな光を投げかけることを試みる。

本稿では, シネクドキを籾山(1997: 31)に従い,「より一般的な意味を持つ形式を用いて，[その一般的な意味に含まれる]より特殊な意味を表す，あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて，[その特殊な意味を含む]より一般的な意味を表す比喩」と定義する。本稿で専ら問題となるのは，より一般的な意味を表すもの，種によるシネクドキである。「手が足りない」のような物理的な部分と全体の関係によるものもシネクドキとされることもあるものの，佐藤 ([1978]1992)とそれ以降の多くの先行研究に従い，それはメトニミーに分類して, シネクドキには含まない。なお, 本稿の分析は， Lakoff and Johnson ([1980] 1986)流の概念メタファーの領域間写像モデルを想定しない。この点で隠喩か提喩か問題をめぐる先行研究の多くと異なるため，本稿の採用する枠組みを第一に紹介することにする。そうすることで筆者が先行研究のどのような点を問題にしようとしているのかがわかりやすくなるだろう。

## 2.　理論的枠組み

本稿が提示する分析は，大枠では使用依拠モデル(Barlow & Kemmer 2000)，とりわけ動的使用依拠モデル(Langacker 2000)に，さらに細部はメタファーの(潜伏性の)上位スキーマ化(媒介)モデル(黒田・野澤 2004，黒田 2007)に基づく。

### 2.1.　動的使用依拠モデル(Langacker 2000)

このモデルは広く人口に膾炙していると思われるため，比喩に関係する部分を中心に簡潔に述べておく。このモデルでは，言語(知識)は「定着度や表現する抽象性の度合いが様々に異なる様々な構造がカテゴリ化や合成や記号化という関係で互いに結びついているような膨大なネットワーク」(p. 67)として捉えられる。多義は，定着度・抽象性が様々な意味

極が同じ音韻極(たとえば「夏目漱石」)と結びついた記号的構造のネットワークとして捉えられる。本稿との関連で重要なのは，ネットワークの拡張(比喩の意味拡張はその一種)は，スキーマ化を伴う傾向があるという点である。カテゴリー化の基準との矛盾を孕みつつカテゴリー化が起こる場合，基準の特徴のうち，カテゴリー化の対象と矛盾するものが抑制・捨象されるからである(p. 76)。そのようにしてカテゴリー化の基準と対象を包摂するものがスキーマである。

メタファーは，動的使用依拠モデルにおいては説明概念ではなく，カテゴリー化の特殊な場合にすぎない (p. 111)。特殊な点は「比較される二つの構造が異なった経験の領域を表し，目標領域(target domain)が起点領域(source domain)と結びつけて了解されるということである。[1] このモデルによるメタファーの記述には，少なくとも起点領域，目標領域，スキーマが必要とされ，いわゆる概念メタファーの具現例だけでなく，類似性に由来する個人のあだ名のような体系性のない例も扱うことができる。「メタファ的な関係で互いに結びつけられるような表現を扱うのに特に新たな道具立てを必要としない」(p. 112)という点は次に紹介する上位スキーマ化モデルとの共通点である。尤も，メタファーについての記述は Langacker(2000)においては概略的で，特に比喩的意味が何かについてそこでは詳しく述べられていない。

### 2.2. 比喩の上位スキーマ化モデル(黒田・野澤 2004，黒田 2007)

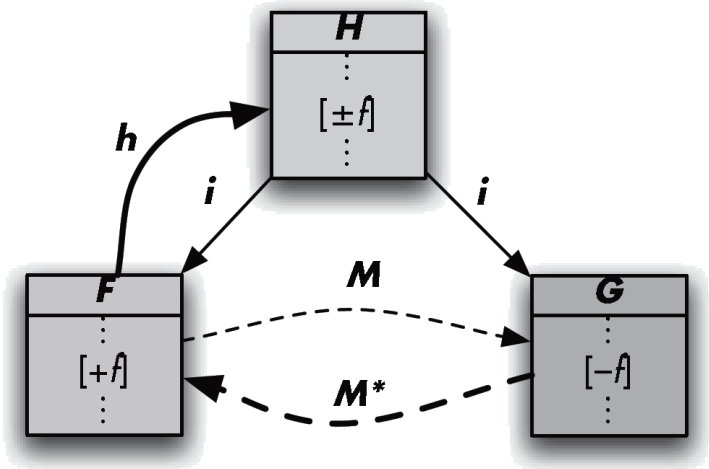
以上のモデルを比喩について精緻化・明示化したものが(潜伏性の)上位スキーマ化(媒介)モデルである。このモデルは，写像モデルの拡張とされてはいるが，領域間写像モデル(Lakoff & Johnson [1980] 1986 など)とは大きく異なり，認知文法のネットワークモデル，動的使用依拠モデルを比喩に当てはめたものである。 実際，このモデルはネットワークモデルと多くの点で互換的な発展形であり(黒田 2007: 229)，「比喩的理解の基盤を「事例ベースの一般化と新しい事例への適用」という形で定式化したもの」(p. 218)とされている。そして，彼らの研究プログラムは用法基盤主義を徹底させている(黒田・野澤 2004: 14)。

このモデルの概要を引用する。なお，このモデルでのスキーマとは，状況レベルの意味フレームのことである。[2]

> 表現 *E* (e.g.，「石頭」[3])を構成する語句 *s*, *t* (e.g.，「石」「頭」)について，(i) *s*, *t* のおのおのが帰属するスキーマ[…]*S* (e.g., [石である(*x*)]), *T* (e.g., [頭である(*x*)])が[*S* IS-A *T*](か[*T* IS-A *S*]のいずれか)の特殊化の関係 (IS-A 関係)が定義できない場合，*S*, *T* 間の不整合を補正するため, 知らないあいだに[*S* IS-A *U*]かつ[*T* IS-A *U*]を満足するような *S*, *T* の上位スキーマ *U*(e.g, [非常に固い (*x*)])が導入され補正が行われ, 理解が達成される．(ii) [*S* IS-A *U*]が *U* の代表例の記述であり，[*T* IS-A *U* ]が *T* についての新規な概念化であるとき，*S* は元領域，*T* は先領域[4]である．(iii)*U* は *S* の抽象化[…]である．(iv)*U* は

多くの場合アドホック概念( [Barsalou 1982[*sic*], Glucksburg et al. 1997])であるが，それが長期記憶になく，文字通り「その場」で生成される場合には *E* は新規な比喩と感じられ，*U* がすでに記憶に定着している場合には，比喩とは自覚されない慣用的比喩である[…]．(黒田 2007: 219–220)

モデルの概略はこのように図示される。*H* が上位スキーマ, *h* が上位スキーマ化にあたる。




***i***: Instantiation relation; ***h***: generalization relation, or "quasi"-abstraction relation
***F***, ***G***: Frames (schematic); ***H***: Frame (super-schematic)
***M*** is a metaphorical mapping from ***F*** to ***G***;
***M*** is a "translation" in that ***M**** "defines" ***G***'s "counterpart" in ***F*** via ***H***.

図 1.　上位スキーマ経由モデルによる比喩写像の特徴づけ(黒田 2007: 227)

ここで重要なのは, 比喩写像 *M* は上位スキーマ化 *h* と上位スキーマの *S*, *T*(図ではそれぞれ *F*, *G*)への特殊化 *i* から合成されるという意味で派生的だということである。つまり，上位スキーマ化は比喩写像に先行する。[5] 従って,「スキーマ関係はシネクドキの認識基盤である」(瀬戸 2007: 43)だけでなく，メタファーの認識基盤でもある。上位スキーマ化が比喩写像を可能にするのであって，逆ではない。上位スキーマ化は,「源泉[領域]と標的領域にある情報の共通性の探知」で，カテゴリー形成と同一視可能であり(黒田・野澤 2004: 6), 比喩を説明するために導入された概念ではない。「動機付けられた過程というより, 知識の自己組織化の過程の一種であり，それ自体は自動的なもの」(同)であるため，そもそもなぜ比喩写像が起こるかの説明となっている。

このメタファー的な意味拡張に伴う上位スキーマこそが慣用句などの意味拡張においてシネクドキの働きによると言われてきた抽象的な意味であるということを 5 節で主張する。

本稿はメタファーをこのようなものと捉える一方で，次に検討していく先行研究はそうではなく，認知言語学において支配的な Lakoff and Johnson ([1980] 1986)流のメタファー観に則っていることに注意されたい(吉村 2014 は例外で，どちらとも違う枠組みに基づいている)。

## 3. 隠喩か提喩か問題をめぐる先行研究

この問題は，籾山(1997)が慣用句の分類に各種比喩を用いたことに端を発する。例えば「この計画の舵をとるのは誰が適任だろうか」(p. 40)の「舵をとる」をメトニミー(先行事象：〈舵を手に取る〉-->[6] 後続事象：〈舵を操作して船を進める〉)とメタファー(〈舵を操作して船を進める〉-->類似の事柄：〈物事をうまく進める〉)が関わるものとし，一方「巨人[軍]に軍配が上がった」(p. 41)はメトニミー(〈[物理的に]軍配が上がる〉-->〈(相撲の)勝ちが決まる〉)とシネクドキ(種：〈相撲において勝ちが決まる〉-->類：〈色々な競技において勝ちが決まる〉)が関わるものとする。しかし両者の区別は不明確で，後の議論を呼ぶことになる。また，籾山(2002: 132)は，シネクドキによる句レベルの意味拡張には特殊から一般への拡張しかなく，逆はないようだと述べている。そうだとすれば，シネクドキの二分類のうち片方しか句レベルの意味拡張に作用しないという非対称性がなぜあるのかが問題として残る(本稿の見解は 5.1 節)。[7]

### 3.1. 笠貫(2002，2013，2017)

笠貫(2002, 2013, 2017)は籾山が取り上げた例に対して異なる分析をする。まず，笠貫は Goossens (1995)の「メトニミーからのメタファー」を(笠貫自身はこうは名付けていないが)「メトニミーからのシネクドキ」と分析する。たとえば，“applaud”はメトニミー(〈拍手する〉-->〈拍手して強い同意を示す〉)が関わる点については Goossens に同意するものの，〈拍手して強い同意を示す〉-->〈(拍手の有無に関係なく)強い同意を示す〉という意味の拡大は下位カテゴリーが上位カテゴリーを表すシネクドキの働きによると主張している。「舵をとる」も同様に，〈物事をうまく進める〉を〈舵を操作して船を進める〉の上位カテゴリーと考え，シネクドキが働いているとする。[8]

前述の通り「舵をとる」を，籾山(1997)はメトニミー＋メタファーと分析するのに対して，笠貫(2013)はメトニミーにシネクドキが働いたものとする。笠貫は，自分は「慣用的意味そのものに注目している」一方で，籾山は「実例として適用された際の指示対象に注目」している(p.72)と両者を対比している。「舵をとる」について言うと，笠貫は〈物事をうまく進める〉に，籾山はその下位カテゴリー〈何か特定の物事をうまく進める〉に「着目した記述となっているため，シネクドキーかメタファーかという記述の違いが生じたと考えられる」(p.73)と解釈している。笠貫は籾山の記述を積極的に否定しておらず，同じ慣用句の意味について，どこに注目するかによって関わる比喩が異なるということになるが，

意味拡張の理論としては問題があろう。我々は慣用的意味そのものに注目すべきなのか，それとも実例よって伝達された個別具体的な意味に注目すべきなのか。慣用的意味を具体的な状況に適用すると考えると，慣用的意味が先立つ必要がありそうだが，本稿では異なる見解を提示する(4.2.2 節)。

### 3.2. 森(2011)：メタファーとシネクドキの“境界事例”

隠喩か提喩か問題を正面から扱った森(2011)は，問題を突き詰めて先鋭化させることを通して，この問い自体に問題がありそうなことを図らずも露見させている。森は，メタファーが関わるものとシネクドキが関わるものには境界事例が存在すると考えている。このことを単なる“カテゴリーの連続性”の一例と考えて，等閑視することは適切ではない。境界事例があるなら両者はどのように連続しているのか，そして，連続性はいかなるパラメータによるものかを明らかにする必要があろう。この点に関して森は，慣用句については，「字義通りの意味が慣用的意味の中に含められると考えられる場合に提喩ととらえられ」，「適用範囲がずれていると考えられる場合隠喩ととらえられ」る(p. 148)とか，「典型例だけを考えれば，隠喩となるのであるが，用法の適用範囲を拡げて考えれば，提喩となる」(p. 147)と述べるにとどまる(固有名詞についての見解は本稿 4.1 節)。

境界事例の具体例として，「舟に刻みて剣を求むる」という慣用句についての森の議論を紹介する。「船から川の中に剣を落とした者が，落ちた位置を舟端に印を付けて，あとから印の下の川底を探したが，舟が動いていたので見つからなかった」(時田 2000: 533)という故事に基づくものである。慣用的意味の記述は辞書によって抽象度に差があり，「時勢の移り変わりに気づかず，いつまでも古いしきたりに固執する愚かさのたとえ」(同)とすれば，これは字義通りの意味(≒故事)を含まないためメタファーと考えられる。しかし，「一つの考えにとらわれて多様な条件を考慮しないたとえ」(『学研国語大辞典』第二版，見出しは「舟を刻みて剣を求む」)とすると，字義通りの意味を含むためにシネクドキであると考えられる。そして，森によればこの基準を当てはめると『日本国語大辞典　第二版』の「舟に刻みて剣を求む」は「時勢の移るところを知らず，いたずらに古いしきたりを守ることのたとえ」とあるのでメタファーであり，同辞典の「剣を落として船を刻む」の語釈は「物事にこだわって事態の変化に応ずる力のないことをたとえていう」とあるのでシネクドキである。そこから「「舟に刻みて剣を求むる」の類は，意味の記述の仕方・あるいは，とらえ方によって，隠喩とも提喩とも考えることができ，両者の境界事例となっていると言えるのである」(p. 145)と森(2011)は結論付けている。辞書の語釈とは比喩的意味という極めて捉えがたい対象を執筆者が分析した結果であり，それが微妙に異なるだけで意味の拡張に関与した比喩の種類が異なってしまうということは，分析者によって異なる比喩によって意味の拡張が起こったということだろうか。むしろ，比喩を用いた意味拡張の記述の枠組みに問題があることを示唆していると筆者は考える。

固有名詞についての森の議論はほぼ同様で，「平成の漱石」という例について，「夏目漱石とある特定の作家をダイレクトにマッピングしているので隠喩とも判断できるが，漱石が〈国民的人気作家〉に一般化されているととらえれば提喩となる。」(p. 144)と述べられている。繰り返しになるが，拡張した意味が成立する際に関わる比喩がこの 2 つの場合で異なるのは理論的に問題があろう。少なくとも，メタファーとシネクドキの関わりについて解明すべきことが残っていることは明らかである。

このように森(2011)は，慣用句・ことわざについて，「字義通りの意味と慣用的な意味の間の関係が問題」(森 2011: 145)と考え，隠喩か提喩か問題については，字義通りの意味と慣用的意味を比較して，その適用範囲がズレている場合はメタファー，字義通りの意味が慣用的意味の中に含められる場合はシネクドキとしている。ここに問題の核心があると筆者は考えている。慣用的意味は，慣用句やことわざの個々の使用において伝達された意味と同じではなく，その蓄積から抽象化を経て得られたもの(を分析者が記述したもの)で，その意味で二次的なものである。比喩(いわゆる概念メタファーではなく，個々の表現レベルのもの)は言語使用の中で起こる語用論的現象であり関与した比喩の種類を問う場合に字義通りの意味と比較すべきは, 個々の使用において伝達された意味である。この考えは，本稿が採用する，言語使用や抽象度の低いスキーマが一次的に重要であると考える使用依拠モデルとも整合する。

## 4. 先行研究の批判的検討

2.2 節で紹介したモデルによる本稿の分析を提示する前に，予備的考察として，比喩と意味拡張に関わる 2 つの点を論じておく。

### 4.1. 比喩の分類と名詞句の意味機能

前述の通り，森(2011)は固有名詞の比喩的使用もメタファーかシネクドキかという観点から論じている。たとえば，「ヒラリー(・クリントン)」が〈トップを目指す女性政治家〉という意味で比喩的に用いられることについて考察している。それによると，書名の

(1) 『ヒラリーを探せ』(横田由美子(著)，文藝春秋，2008 年)

における「ヒラリー」は，トップを目指す女性政治家の事例であったヒラリー(の名前)によって〈トップを目指す女性政治家〉を表していることからシネクドキとされる。ここでは，「下位カテゴリーから上位カテゴリーへの転換がすでに起きていると考えられる」(p. 144)とのことである。一方，特定の人物を「日本のヒラリー」と称する場合については，森はメタファーとする考えとシネクドキとする考えの両方を述べている。まず，

(2)　A 女史は日本のヒラリーである。(同)

の「ヒラリー」は「認知領域が別であり，その特定の人物とヒラリー・クリントンとをダイレクトに結んでいる」(同)ためにメタファーとされる。一方，先程と同様に「ヒラリー」が「その固有名詞が指し示すものから一般化して」(同)〈トップを目指す女性政治家〉の意味になっていると考えて，それを「〈日本における，トップを目指す女性政治家〉と解釈すれば提喩ともなる」(同)という考えも示されている。[9] 結局森は，「日本のヒラリー」のような例は，「隠喩と提喩のどちらかに限定して考えることはできず，境界事例としてしか解釈できないのではないだろうか」(同)と，どちらかに分類することをせずに，「隠喩とも提喩とも解釈できる境界的な事例」(同)とみなしている。

このような固有名詞の比喩的使用はレトリック研究においてアントノマーズ(換称)と言われ，シネクドキの一種とされてきた(佐藤 [1978]1992，瀬戸 1997，Meyer 1995: Ch. 10 など)。ただ，レトリック研究の伝統の外においては Glucksberg (2001: 47)のようにメタファーとして分析されていることもあり，隠喩か提喩か問題が日本における研究だけで生じているわけではないことが確認できる。固有名詞の比喩的使用についても隠喩か提喩か問題は決着していないのである。

ここで，名詞句の意味機能(西山 2003, 2013 など)という観点を導入したい。(1)の「ヒラリー」はこの観点から言えば，不特定な対象を指示する指示的名詞句で，次の「医者」と同様である。[10]

(3)　太郎は誰でもいいから医者と結婚したいと言っている。

一方，(2)の「ヒラリー」は普通の解釈では措定文の叙述名詞句である。つまり，次の「医者」と同種の非指示的名詞句で，主語名詞句の指示対象に帰される属性を表す。

(4)　太郎は医者だ。

叙述名詞句は対象を指示しないために，(2)の「ヒラリー」はカテゴリー全体を表す種によるシネクドキのように感じられるのだろう。[11] アントノマーズの例として挙げられるのは，(2)のように叙述名詞句のものが多い。その場合，通常個体を表す名前がカテゴリーを表しているように感じられるために種によるシネクドキとされるものの，シネクドキもメタファーも語彙語用論(Wałaszewska 2015, Wilson 2003, Wilson and Carston 2007 など)のレベルの現象であり，そのレベルで問題となる隠喩か提喩か問題に名詞句の意味機能の違いは関与しないはずである。

(1)(2)のような「ヒラリー」の比喩的意味が定着した場合にレキシコンに記述するとすれ

ば,〈トップを目指す女性政治家〉という意味１つで足りる。(3)の「医者」も(4)の「医者」も英語で言えば medical doctor となる語義であるのと同様である。これらにおいては，同じ意味の語が文中で異なる意味機能を担って使われているにすぎない。(1)では「ヒラリー」がそのカテゴリーに属する不特定の対象を指示している一方で，(2)ではそういう意味の属性を表している。これは名詞句の文中での意味機能の違いによるもので，意味機能から独立した語彙レベルの意味の違いではないし，まして関わっている比喩の違いによるものではない。

どの種類の比喩が働いているかを検討する余地があるのは，語やイディオムが語彙的意味から拡張された解釈を受けるレベルである。例えば,「色眼鏡」は字義通りには〈レンズに色のついたメガネ〉だが，メタファーによって〈先入観〉のような語義も持つに至ったと考えられる。“Drug”は〈薬〉という意味からシネクドキによって〈麻薬〉をも意味するようになったと考えられている。「色眼鏡」と“drug”の比喩の種類の違いに名詞句の用法の違いは関係がない。１つの比喩的語義は，ある一定の比喩プロセスを経て発生したと考えるのが自然であろう。「ヒラリー」の例に戻ると，不特定指示の(1)での〈トップを目指す女性政治家〉という語義がシネクドキで得られ，叙述名詞句の(2)での〈トップを目指す女性政治家〉という語義がメタファーで得られたという分析は不自然ということになる。以上の議論をまとめると，隠喩か提喩か問題に名詞句の意味機能を持ち込んで議論を混乱させてはならないということである。[12]

### 4.2.　説明概念としてのシネクドキと理解・産出における一般的な意味

次に，隠喩か提喩か問題に対するシネクドキ説が果たして説明として機能しているかを問題にしたい。籾山(1997)や笠貫(2013)などの議論は，字義通りの意味と分析者の記述した拡張した意味を比較し，その結果に基づいて比喩のラベルを当てはめているにすぎない。シネクドキが作用していることの根拠として挙げられるのは，字義通りの意味と論者が提示する慣用的意味・比喩的意味の間に包摂関係があることだけである。しかしこれは原義と転義の結果(を抽象化したものの一案)を比べただけであって，ある意味を直接抽象化する種によるシネクドキという作用が(もしあるとしたら)その間に働いたということの証拠としては弱い。そもそもある比喩によって意味がどう拡張したかがどれだけ明らかになるかは，その比喩のメカニズムが既にどれだけ明らかであるかに依存するが，そのメカニズム，特にシネクドキのメカニズムはよくわかっていない。[13] シネクドキはメタファー，メトニミーに比べて研究の蓄積に乏しく，どのような場合にシネクドキが成り立つのかといったことがよくわかっているとは言い難い。ここで，よく言われるようにメタファーには対象を比較する認知能力が，シネクドキには同じ対象を包摂関係にある様々なカテゴリーでカテゴリー化する認知能力が基盤となっているということをもって，メカニズムがよくわかっていると考えるのは早計である。“基盤となる”とされる認知能力を１つ指摘すれば

現象が解明されたことになるわけではない。たとえば，言語コミュニケーションは心の理論の認知能力が基盤になっているといえば，前者のメカニズムがよくわかっていることにしてよいわけではない。

従来の研究がシネクドキのメカニズムに肉迫できていない原因の一つは，語彙化した例を主に扱っていることである。例として吉村(2014)を取り上げる。この研究は，本稿の問題意識と重なる部分が大きい論文である。瀬戸(1997)と Glucksberg (2001)を対比して，「いったいメタファーとシネクドキは，本当に異なるタイプのレトリックなのか，両者はどのような関係にあるのだろうか」(吉村 2014: 43)と問い，両者の共通点と相違点を明らかにすることを目的としているからである。吉村(2014)のシネクドキについての議論の大きな問題の一つは，分析されているシネクドキの例が「親子〈-->鶏の親子〉丼」「花〈-->桜〉見(に行く)」「筆〈-->筆記用具〉箱(を取って下さい)」など，いずれも語の意味として定着した例，しかも比喩が関わらなくともしばしば意味的に不透明になる複合語の一部であることである。山泉(2005: 278)で述べられているように，シネクドキのメカニズムを論じるにあたって，既に定着した例は不適切である。語彙化した比喩的意味は，原義といかなる関係にあろうとも拡張プロセス抜きでコード解読によって伝わると考えられるからである。ただ, 吉村(2014)が隠喩か提喩か問題に関連して Glucksberg (2001)の上位カテゴリーに着目したのは慧眼であろう。本稿が採用する理論ではそれと密接に関わる上位スキーマ化が重要な役割を演じるのである。

#### 4.2.1. 説明概念としてのシネクドキは有効か

笠貫(2013)のシネクドキ説の主張を振り返っておこう。“tapplaud” について「指示する意味がメトニミー基盤の指示対象[拍手を伴って強い同意を表すという行為]からその上位カテゴリー[強い同意を表すという行為]を指示するシネクドキーの働きによると考えるのが自然であろう」(p. 68)と述べられている。シネクドキが働いていると考えられている理由は，元の意味が拡張後の意味を含む，つまり類と種の関係にあるということである。何らかのプロセスの結果としてその関係にある転義を種によるシネクドキと呼ぶことは，それ自体間違いであるわけではない。[14] ここで重要なのは，上の説明においてシネクドキが説明概念とされていることである。しかし，転義の結果としてのシネクドキは，転義を説明する固有のプロセスとしてのシネクドキの存在を含意しない。

種によるシネクドキは，「筆箱」「花見」のような定着したもの(の一部)や，世界に新しい基本レベルと思われるカテゴリーを作った製品名(例 :「ウォークマン」)の例がよく挙げられるものの，メタファーのように新規な例を自由に作ることが難しい。たとえば「雀」と言って鳥全般を意味することは，しばしば種によるシネクドキの必要条件とされるプロトタイプの要件(吉村 2014 など)を満たしているものの，普通はできない。どのような場合に種によるシネクドキが可能なのか，どのようなメカニズムでシネクドキが起こるのかが

明らかでないままで「シネクドキの働きによる」というのは空虚な説明であり，1 つの例の字義的意味と比喩的意味の間に種と類の関係が成り立っているからといって，その種と類の関係のためにその比喩的意味になったという保証はない。種によるシネクドキとしてよく知られた次の例を検討しよう。

(5) Man shall not live by bread alone. (人はパンのみによって生きるにあらず。マタイ 4・4)

この例を元にして比較的自由に新規な例や解釈を作ることができる(山泉 2006)。しかし，山泉(2006)に述べられているように，“X shall not live by Y alone”の X と Y に様々なものを入れてみると，次の例が示すように，Y の比喩的意味は必ずしもそれを含む類には収まらない。

(6) A little human silliness and weakness would have been much more productive of human happiness! Man shall not live by syllogisms alone, even though each one be an ideal formula for the production of perfection.
(https://www.thelema.ca/156/Astrology/mercury_in_virgo.html)

(7) Would the Church take care of our material needs as it takes care of our spiritual needs. Man shall not live by church alone, but by every other thing!
(https://www.ghanaweb.com/GhanaHomePage/features/We-ve-Built-Our-Churches-Now-Let-8217-s-Build-Our-Factories-47775)

例えば(7)の最後の文の“church”は教会を含む何らかのカテゴリー全体を表しているのではなく，むしろ spiritual needs を満たすものを表している。この意味に至るプロセスの自然な説明は，“church”からアクセスできる百科事典的知識から，文全体の意味と整合し，期待された認知効果を達成するアドホック概念を構築することだろう(Wałaszewska 2015, Wilson and Carston 2007，山泉 2017 近刊など)。そう考えると，(5)についても，種によるシネクドキと呼ぶべきプロセス，つまり，種が類全体をいきなり表すことが本当に作用しているのか疑わしい。

#### 4.2.2. 一般的な意味は理解・産出に先立って必要不可欠か

ことわざや慣用句の意味に種によるシネクドキが関わるとする主な根拠は，それらが複数の個別事例それぞれに適用可能なことである。このことから，ことわざや慣用句が全ての事例を包摂する抽象的な意味を持つと想定され，その成立にシネクドキが作用したと考えられているのであった。しかし，ある比喩的表現が複数の個別事例に別々に適用可能でも，その表現が字義通りの意味より一般的な意味を担っていることは保証されない。個別

事例に適用された文脈でことわざを初めて耳にする際，予め一般的な意味を知らなくとも適切に理解できることは多い。また，産出者でさえ，ある表現がことわざであることを知らずに，偶然同じ表現を比喩的に同じ意味で用いることはあり得ないことではないし，今あることわざも，ことわざになる前には，ことわざであるという意識も定着した抽象的な意味も無いままに使われたことは疑いない。「一般性は個別性である」という概念メタファーを想定する必要がないだけでなく，前もって「特定レベルの図式が一般化され，その結果無数の個別的な図式にあてはまる」(Lakoff & Turner [1989]1994: 179)と考える必要もないのである。

さらに，個別具体的な比喩的意味から独立した一般的な意味がシネクドキによって生じたということを疑わせるデータがある。一般的な意味が本当にあるのであれば，それは複数の個別事例に別々に適用できるだけでなく，抽象的な意味が包摂する複数の個別事例に同時に適用できるはずである。しかし，それを実際にしてみると，単なる比喩にはならないことがある。次の例を検討しよう。

(8)　?社長も船頭も上手く舵をとっている。(石塚政行氏，個人談話)

社長は会社の舵を取る一方，船頭は字義通りに船の舵を取る。どちらも「舵を取る」のシネクドキ的意味〈物事をうまく進める〉に収まっているものの，この例は「舵を取る」の普通の比喩的意味を超えたくびき語法的逸脱が感じられる。笠貫(2002)は，「舵をとる」のような比喩表現の「指示対象は，メトニミー基盤の指示対象の上位カテゴリーである」(p. 109)と述べているけれども，この場合そうは考え難い。種によるシネクドキの一種，アントノマーズの例とされる「ドンファン」〈好色漢〉についても，「中日本ドンファン連合」などとして類を表そうすると，単なる比喩以上の逸脱が感じられる。[15]〈好色漢〉を意味する「ドンファン」がそもそも種によるシネクドキという作用によって類として〈好色漢〉を表しているのなら，こうはならないはずである。このことから，これらが種によるシネクドキによる意味拡張ではないことが示唆される。

## 5.　比喩的意味拡張の動的使用依拠モデルによる隠喩か提喩か問題の解決

以上の先行研究の批判的検討を踏まえて，隠喩か提喩か問題への本稿の答えを提示する。その要点を述べると，慣用句などの意味拡張においてシネクドキの働きによると言われてきた抽象的な意味は，メタファー的な意味拡張に伴うスキーマだということである。従って，問題に対する本稿の立場は，どちらかと言えばメタファー説ということになるものの，メタファーを説明概念とはしない。

前節の議論から，シネクドキ説が維持し難いことが明らかになった。自ずとメタファー説の旗色が良くなってくるとは言え，個別具体的な比喩的意味を包摂する抽象的な意味が

比喩表現の意味として感じられることをシネクドキという概念に訴えずに説明しなければならない。ここで参考になるのは，隠喩か提喩か問題をこれまでで最も深く突き詰めた森(2011)である。そこでは字義通りの意味，慣用的意味に加えて，「現実の言語使用」(p. 147)が言及されている。これが隠喩か提喩か問題の突破口であると筆者は考える。この問題は言語使用を重視する動的使用依拠モデルで捉えると解決できるからである。

Langacker のネットワークモデルにシネクドキとメタファーを位置付けることに前例がないわけではない。瀬戸 (2007)はシネクドキをメタファーと同じくネットワークモデルに位置付け,「種で類を表すパターンはスキーマ化に相当し」(pp. 39–40)と適切に捉えている。しかし，スキーマ化がメタファー的拡張と不可分な関係にあることが充分に把握されていたとは言い難い。むしろ，メタファー・シネクドキ・メトニミーを「それぞれ独立した意義展開のパタンとして認める必要がある」(p. 40)と主張している。籾山(2001)は本稿の見解にさらに一歩近く,「ネットワーク・モデルにおいて，拡張関係による外への発展が，必然的にスキーマ関係による上への発展を伴う」(p. 44)点も指摘しているものの，この点が隠喩か提喩か問題に繋がる点までは述べられていない。

なお，瀬戸のようにネットワークモデルを多義の記述のモデルとすることには筆者も異論はないけれども，瀬戸は多義の記述として，話者の言語知識の記述ではなく意義展開のパターンを記した(書物としての)辞書の記述を想定している。動的使用依拠モデルをそのような辞書のための多義記述モデルとするのは問題があるかもしれない。メタファー的拡張の蓄積の結果として “シネクドキ” になる場合はどちらとすべきかという，隠喩か提喩か問題が生じるためである。

### 5.1. シネクドキによる意味と言われてきたものの正体

先行研究においてシネクドキ的意味と思われてきたものは, 使用事象(usage-event)における個別具体的な伝達された意味より抽象的な慣用的意味であり，それは使用事象の積み重ねの結果定着した上位スキーマ(を分析者が記述したもの)であると本稿は主張する。抽象的な慣用的意味は種によるシネクドキ(という内実がよくわかっていないもの)によっていきなり生じたのではなく，上位スキーマが定着したものである。「舵をとる」を例にして言うと，元々メタファー的な拡張があり，比喩的に個々の具体的な(船の操縦以外の)物事を進める場面に多く用いられている。その際，元の意味と個々の具体的な比喩的意味から独立した上位スキーマが関与する(2.2 節)。分析者が慣用句としての「舵をとる」の抽象的・辞書的意味を記述する際に，様々な用例におけるメタファー的拡張に伴う上位スキーマ群のさらに上位のスキーマを捉えたものが〈物事をうまく進める〉という高度に抽象的な意味に他ならない。「ヒラリー」の例(1)(2)も同様に，メタファー的拡張とそれに伴う上位スキーマ化として捉えられる。

シネクドキをこのような単なる意味的スキーマの抽出やその適用と同一視しないなら，

この拡張をわざわざシネクドキという必要はない。もし従来想定されていたシネクドキの作用で〈物事を進める〉という抽象的な意味が直接できたとすると，(8)や「全日本舵取り協会」のような用法が元から可能で，抽象的意味の特殊化として「大阪市の舵を取る」のような用法があることになるが，前述の通りこれは信じがたいため，この拡張に「シネクドキ」というラベルを付与することはむしろミスリーディングである。なお，本稿の議論は他のタイプのシネクドキにまで一般化できるものではない。たとえば，太郎を「生物」という上位レベルカテゴリーを表す表現で指示するようなタイプのシネクドキ(山泉 2005)には適用できない。シネクドキには様々なタイプのものがあり，下位区分を 1 つ 1 つ検討していく必要がある(p. 278)。

比喩的拡張における上位スキーマ化が実体である“シネクドキ”と言われているものと“メタファー”と言われているものは，同じ現象をベースとして異なる部分をプロファイルしているということになる。メタファーとシネクドキの親近性(佐藤 [1978]1992: 203)の少なくとも一端はここにあるのだろう。なお，Langacker (2000:112–113)には，個々のメタファー写像間の共通性を捉えたスキーマとしてメタファー的な拡張のパターンが立てられ，その他に慣習的な意味拡張のパターンとして，標準的なメトニミー的拡張パターンが挙げられている。隠喩か提喩か問題でシネクドキとされたものは，メタファー的な拡張パターンの一側面であるから，これを別個のパターンとして立てることは適切ではない。

本稿の説は先行研究が残した問題の幾つかに答えをもたらす。まず，籾山(1997)が指摘した，句のレベルにおけるシネクドキによる意味拡張には類によるシネクドキによる一般的な意味から特殊な意味への拡張(あるいは縮小)がないということが説明できる。シネクドキによると考えられていた意味拡張は，拡張に伴う上位スキーマの定着であるため逆方向には働かないのである。第二に，森(2011)はいわゆる境界事例について「典型例だけを考えれば，隠喩となるのであるが，用法の適用範囲を拡げて考えれば，提喩となる」(p. 147)と述べている。周辺例ほど字義通りの意味と比喩的解釈に共通するスキーマが抽象的になるために，それを基に慣用的意味を考えると，抽象性が高くなる。このスキーマと字義通りの意味との間の抽象度の距離のために，周辺例はシネクドキと感じられやすくなるのだと理解できる。第三に，同じ慣用句・ことわざの語釈がその抽象度において揺れがある(森 2011)のは，定着したスキーマ・慣用的意味の抽象性は積み重なった使用事象次第で，個々人の言語知識によって様々だからである。個人差が生じる原因の一つは，同じ慣用句などでも人によって経験する用例が異なることである。ばらつきのある用例の詳細はスキーマ化において捨象されるものの，出会う用例に偏りがある場合，抽出された上位スキーマにおいても個人差が残る可能性がある。これと関連するもう一つの個人差の原因は頻度である。スキーマがカテゴリー化に用いられる頻度が高いと活性化しやすくなり，カテゴリー化において競合に勝ちやすくなる，つまり，カテゴリー化に用いられやすくなる。様々な対象をカテゴリー化した結果，上位スキーマ群のスキーマ(慣用的意味として記述される対

象)はさらに抽象化することになる。

以上から，隠喩か提喩か問題に対する本稿の立場はどちらかと言えばメタファー説ということになる。しかし，メタファーを説明概念としていない点が先行研究とは異なる。

### 5.2. 結論：比喩理論における動的なスキーマの必要性

かくして隠喩か提喩か問題は解消した。比喩的意味拡張における“シネクドキ”の正体は，メタファー的拡張に伴う上位スキーマ，あるいは名詞句(特に叙述名詞句)の意味機能に由来する意味作用である。吉村(2014)を除くこの問題の論者が採用していたと思われる領域間写像モデルにおいては，問題解消の鍵となった上位スキーマ化という視点がなく，メタファーにスキーマ化が伴うという点は見落とされていたようである。[16] 吉村が注目した Glucksberg(2001)のモデルにはスキーマ相当の上位カテゴリーが導入されていたものの，その定着や一層の抽象化といった動的側面は捉えられていなかった。動的使用依拠モデルに基づいた上位スキーマ化モデルはこれらの点を取り込み，隠喩か提喩か問題を解消するとともにシネクドキとメタファーの関係にも新たな光を投げかける。

**註**

* 本稿は，「言語学シュンポシオン」(2017 年 9 月於東京農工大学)における筆者の口頭発表を元にしている。その参加者の方々と 2 名の匿名査読者には貴重なコメントを数多くいただいた。本稿は，JSPS 科学研究費(課題番号：17K17842)の助成を受けたものである。

1 対応する領域が所与のものとしてあるという点は次に述べる上位スキーマ化モデルとは異なる。

2 尤も，全ての比喩がフレームの形で記述できるとまでは主張されていない(黒田 2007: 219)。

3 「彼の頭は石だ」の方がわかり易ければそれでもよい。

4 元領域，先領域とはそれぞれ，根源領域(source domain)，目標領域(target domain)のこと。それぞれ源泉領域，標的領域とも言われる。

5 筆者の理解では，比喩の解釈に必要な上位スキーマを持たなかった聞き手が，比喩を耳にしたことをきっかけに上位スキーマを作り出すこともある。この場合にも，上位スキーマ化が比喩写像に論理的に先行すると考えられる。

6 Langacker (2000: 65)に従って，拡張(基準と対象との間に食い違いがあるカテゴリー化)を破線の矢印で表すことにする。

7 籾山(2002: 140)はメトニミーに基づいて慣用的意味が成立しているものについて，もう一つの非対称性を挙げている。「事柄の部分―全体関係に基づく場合，字義どおりには全体を表し，慣用的には部分を表すというものはないようです」という点である。認知言語学では，メトニミーは参照点能力の発現と捉える説(笠貫 2013 など)と単一フレーム内の焦点移動と捉える説(西村 2002 など)が少なくともある。全体を参照点としてその部分にアクセスするのは，典型的な参照点能力の発現であるから，それにあたる慣用句がないことは説明を要する。

8 鍋島(2002)は，「一般性は個別性である(GENERIC IS SPECIFIC，Lakoff & Turner ([1989] 1994))」は概念メタファーかという問題を論じて，「「一般性は個別性である」はメタファーではなくシネクドキそのものであると結論付けている(鍋島 2002: 187)。ことわざの理解に関してスキーマ化した理解のレベル(Generic レベル)が存在することを前提とし」(p. 187)と述べて Lakoff & Turner ([1989] 1994))の考えに従い，ことわざの理解に generic スキーマが働いていることは認めているため，隠喩か提喩か問題にはシネクドキと答える立場と考えてよいと思われる。

9 同様の考えは多門(1999: 108)にもみられ，「マスオさん」(妻方の両親と同居する夫)とい

う例について，「B 君はマスオさんだ」とすると隠喩になるとし，「類包含関係の見方をとると，隠喩と提喩は焦点化する面が違うだけで，基盤は同じだということを示している」と述べている。

[10] これに対して，ヒラリー・クリントンが行方不明で「ヒラリーを探せ」と言う場合は，「ヒラリー」は特定の対象を指示する。

[11] Glucksberg (2001)などの類包含理論のメタファーの例が基本的に措定文なのはこのことと密接に関わっていると思われる。措定文の叙述名詞句がメタファーの場合には，後述の上位スキーマ化が他の場合よりも純粋な形で現れ，字義通りの場合よりも抽象的なカテゴリーを表現していると考えやすいのである。

[12] もっとも，名詞句の用法と比喩の種類に相関関係が見られる可能性はある。つまり，ある種の意味機能を担う名詞句が非字義通りに使われる場合にある種の比喩が関わることが多いということがあるかもしれない。例えば，メトニミーは指示的表現と相性がよいかもしれないし，メタファーは叙述名詞句と相性がよいかもしれない。

[13] ここととおそらく同様の趣旨で，黒田・中本・野澤(2005: 190)では，どういう仕組みによるかはともかく概念拡張が存在することと，概念(比喩)写像による概念拡張の“説明”，つまり，概念に写像が働いた結果として拡張しているとすることの区別の重要性が述べられている。

[14] 同様にネットワークモデルにおける単なる事例化(instantiation)を類によるシネクドキに相当するものと瀬戸 (2007: 40)のように考えることも，できなくはない。

[15] 同様に，物事をうまく進める人たち—一家の運営をする人，会社の運営をする人，サッカーチームの運営をする人，船の舵を取る人など—が集まった協会を「全日本舵取り協会」と名付けるのは，個別事例それぞれは全て「舵を取る」の比喩的意味に収まっているものの，「舵を取る」の普通の比喩的意味を超えた逸脱が感じられる。ただ，この例も「中日本ドンファン連合」という例も，慣習化したスキーマ的表現「[「全日本」などの領域名]＋X＋[「協会」「連合」など]」の変項 X を占める値として普通でないものが入っているために逸脱が感じられる可能性もある。

[16] 領域間写像モデルの発展とも言え，一般スペースを設けるブレンディング理論(Fauconnier & Turner 2002)と上位スキーマ化モデルとの比較は黒田・野澤(2004: 4.3)を参照。

## 参考文献


笠貫葉子 (2002). 「複合的比喩の認知的基盤」*KLS*, 22, 105–114.

笠貫葉子 (2013). 「複合的比喩「メトニミーからのメタファー」について」森雄一・高橋英光(編著)『認知言語学—基礎から最前線へ—』(第３章「メタファー」［最前線編］) 東京：くろしお出版, pp. 65–78.

笠貫葉子 (2017). 「複合的比喩「メトニミーからのメタファー」の成立基盤と分類について」『メタファー研究会 夏の陣 2017「比喩と隠喩」』配布資料.

金田一春彦・池田弥三郎(編) (1988). 『学研国語大辞典(第 2 版)』東京：学習研究社.

黒田航 (2007).「比喩理解におけるフレーム的知識の重要性: 比喩表現の程度の差を明示できる比喩の記述モデルの提案」楠見孝 (編)『メタファー研究の最前線』東京：ひつじ書房, pp. 217–238.

黒田航・中本敬子・野澤元 (2005).「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」山梨正明他(編)『認知言語学論考 4』東京：ひつじ書房, pp. 133–269.

黒田航・野澤元 (2004).「比喩理解におけるフレーム的知識の重要性—FrameNet との接点—」MS. [http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames.pdf]

佐藤信夫 ([1978] 1992). 『レトリック感覚』東京：講談社.

瀬戸賢一 (1997). 『認識のレトリック』東京：海鳴社.

瀬戸賢一 (2007). 「メタファーと多義語の記述」楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』東京：ひつじ書房, pp. 31–61.

多門靖容 (1999). 「変異・複合タイプ比喩をめぐって—古典散文例を中心に」『愛知学院大学文学部紀要』29: 103–116.

時田昌瑞 (2000). 『岩波ことわざ辞典』東京：岩波書店.

鍋島弘治朗 (2002). 「Generic is Specific はメタファーか—慣用句の理解モデルによる検証—」『日本認知言語学会論文集』2: 182–191.

西村義樹 (2002). 「換喩と文法現象」西村義樹(編).『認知言語学 I：事象構造』東京：東京大学出版会, pp. 285–311.

西山佑司 (2003). 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』東京：ひつじ書房.

西山佑司(編著) (2013). 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る—』東京：ひつじ書房.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部(編) (2003).『日本国語大辞典(第二版)』東京：小学館.

籾山洋介 (1997).「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』80: 29–43.

籾山洋介 (2001). 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明他(編)『認知言語学論考 1』東京：ひつじ書房, pp. 29–58.

籾山洋介 (2002).『認知意味論のしくみ』東京：研究社.

森雄一 (2011). 「隠喩と提喩の境界事例について」『成蹊國文』44: 150–143.

山泉実 (2005). 「シネクドキの認知意味論へ向けて：類によるシネクドキ再考」山梨正明他(編)『認知言語学論考 4』東京：ひつじ書房, pp. 272–312.

山泉実 (2006). 「ドメインの統一による種で類全体を表す表現の分析」『日本認知言語学会論文集』6, 288–298.

山泉実 (2018 近刊). 「佐藤信夫の「逆隠喩」をめぐって：関連性理論の語彙語用論の観点から」『語用論研究』19.

吉村あき子 (2014). 「メタファーのカテゴリー分析とシネクドキ」『欧米言語文化研究』(奈良女子大学文学部 欧米言語文化学会) 2: 43–58.

Barlow, M. and Kemmer, S. (2000). *Usage-based models of language*. Stanford: CSLI Publications.

Barsalou, L. W. (1983). Ad hoc categories. *Memory & Cognition*, 11, 211–227.

Fauconnier, G. and Turner, M. (2002). *The way we think: Conceptual blending and the mind's*

*hidden complexities*. New York: Basic Books.

Glucksberg, S. (2001). *Understanding figurative language: From metaphors to idioms.* Oxford: Oxford University Press.

Glucksberg, S., McGlone, M. S., and Manfredi, D. A. (1997). Property attribution in metaphor comprehension. *Journal of Memory and Language*, 36, 50–67.

Goossens, L. (1995). Metaphtonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. In Paul Pauwels et al. (eds.), *By word of mouth: Metaphor, metonymy and linguistic action in cognitive perspective* (pp. 159–174). Amsterdam: John Benjamins.

Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors we live by.* Chicago: University of Chicago Press. (渡辺昇一他(訳). (1986). 『レトリックと人生』東京：大修館書店.)

Lakoff, G. and Turner, M. (1989). *More than cool reason: A field guide to poetic metaphor.* Chicago: University of Chicago Press. (大堀俊夫(訳) (1994).『詩と認知』東京：紀伊國屋書店.)

Langacker, R. W. (2000). A dynamic usage-based model. In M. Barlow & S. Kemmer (Eds.), *Usage-based models of language* (pp.1–64). Stanford, CA: CSLI Publications. (坪井栄治郎(訳). (2000).「動的使用依拠モデル」坂原茂(編)『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房, pp. 61–143.)

Meyer, B. (1995). *Synecdoques: Etude d'une figure de rhétorique.* Tome II. Paris: L'Harmattan.

Wałaszewska, E. (2015). *Relevance-theoretic lexical pragmatics*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.

Wilson, D. (2003). Relevance and Lexical Pragmatics. *Rivista di Linguistica*, 15(2), 273–291.

Wilson, D. and Carston, R. (2007). A unitary approach to lexical pragmatics. In N. Burton-Roberts (ed.), *Pragmatics: Critical concepts* (pp. 230–259). Basingstoke: Palgrave Macmillan.

**要旨**　「舵を取る」などの慣用的意味の成立に(メトニミーと共に)関わっているのはメタファーかシネクドキかについて，意見が分かれている。動的使用依拠モデルの比喩のモデルである上位スキーマ化モデルに基づいてシネクドキとメタファーの関係をとらえることで，この問題に答えることを試みた。先行研究においてシネクドキ的意味と思われてきたものは,使用事象における個別具体的な伝達された意味よりも抽象的な慣用的意味であり,使用事象における意味拡張の積み重ねの結果定着した上位スキーマを記述したものであると主張した。それと共に，比喩の説明に使われるシネクドキという概念を検討し，説明概念として機能していないことを述べた。また，意味拡張にどの種類の比喩が関わっているのかを検討する際に，比喩によって生じる語彙レベルの意味の違いと名詞句の文中の意味機能の違いによる文レベルの意味の違いを混同するべきでないことを主張した。